

## 編集後記（航跡第 15 号）

14 号の編集後記に依って、2 名の方から返信をいただきました。（「ハガキによる意見・感想等」の最後 5 頁に掲載）3 期の匿名の方と 11 期の中神さんです。中神さんは参考資料として 「原子力発電」（武谷三男） 「福島原発事故をめぐって」（山本義隆） 「原発ホワイトアウト」（若杉冽） 「東京ブラックアウト」（若杉冽）を挙げています。私が中神さんのはがきを読んでまず思ったのは、中神さんの言う「自然」というのはどのような「自然」なのだろう、という素朴な疑問でした。もともとの漢語のイメージだと老荘思想の「無為（自然）」- なんら作為もせず生きる - という意味でしょうし、日本語だと - ありのままの～、あるいは天然 - という意味合いで漢語とは違うようです。中神さんは数学者なので、古代ギリシャ語の「ピュシス（*physis*）ラテン語に訳された「ナトゥラ（*natura*）」- 火や水のような万物の根本原理 - という意味で使われていると推測します。古代ギリシャでは、「自然」（*physis*）に対立する概念として、掟や慣習、法律を意味する「人為」（*nomos*）を想定し、世界を説明しようとした。

したがって「自然の成り立ちに反する」（生まれたままの）自然には存在しない機械を作り、自然の力をだまして利用する「技術」を蔑視するという思想は、古代ギリシャの哲学者たちに源流を持ち、その系譜がルソーの「自然に還れ」という社会思想やハイデガーの技術論などのヨーロッパ思想の底流に受け継がれ、何かことが起きると表に出て来ます。中神さんは、自然に存在する 4 つの力のうち「強い力」を利用する原子力技術にのみ「自然の成り立ちに反する」として否定しています。しかし、「自然の成り立ちに反した」技術のどこが悪いのでしょうか。

の著者である山本義隆氏は、科学技術がもはや人類にはコントロールできない段階に達し、これまで築き上げてきた文明は行き詰まっている。もはや、科学技術のこれ以上の進展を止めなければ人類は滅亡すると主張しています。山本氏も、*physis* と *nomos* を対立概念として想定し、*physis* の優位性を主張する古代ギリシャの哲学者たちが作った思考の枠組みから一步も出ていません。

「反原発思想」への疑問は、科学技術のこれ以上の進展が人類を滅ぼしかねないと言うのであれば、それは原子力利用に限るものではないことです。二つの危惧があり、一つは遺伝子工学です。iPS 細胞（万能細胞）も自然にはなく「自然の成り立ちに反して」います。

遺伝子工学は、人類を悩ましてきた数々の病気の強力な治療法となるでしょうが、同時にいままで存在しなかった異常な能力を持つ「新人類」の誕生や首から下は人間、上は動物とといったいままで存在しなかった「自然の成り立ちに反する」種が誕生する危うさもはらんでいます。もう一つは人工知能で、電子計算機もまた自然には存在しなかった「自然の成り立ちに反する」ものですが、例えば自動運転の技術が確立すれば、能力が衰えた高齢者や脳の病気で障害を負った人も車を運転できるようになるでしょう。

しかし、現時点では人工知能が意識や意志を持って人類を支配あるいは滅亡に導くことはあり得ませんが、宇宙論を専門とする物理学者のホーキングはその可能性を警告してい

ます。少なくとも人工知能の判断が人間の判断より優先されることが多くの場面で見られるようになるでしょう。また無人機（ドローン）による攻撃は、将来はロボット技術と結びついて、映画「ターミネーター」で描かれたように人間がロボットと戦わなければならないことになることは十分予想されます。

nomos によってもたらされたこれまでの文明が行き詰まり、これ以上の科学技術の発展を止めなければ人類が滅亡すると主張するのであれば、これら全てを止めるべきであり、なぜ原子力だけこだわるのでしょうか。

福島原発事故で起きた低線量被曝については、次の機会があれば書きたいと思います。

28期 永田尚之